

王であるキリスト

2018.11.25

ヨハネ 18・33b-37

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

今年も教会の典礼の暦、典礼暦の最後の主日を迎えました。教会の典礼暦では一年の終わりに、この世の終わり、終末について黙想するよう、終末について語る聖書の箇所が朗読されます。先週の主日の福音においても、今日の第一朗読のダニエルの預言においても、聖書のこの世の終わり、終末についてのメッセージを告げています。しかし、聖書のことばが語っていることは、この世の終末を前提とした上で、終末の出来事の彼方に、天の雲に乗って来られる、この世の真の審判者である「人の子」の姿をわたしたちに指し示すことに主眼が置かれています。一年の典礼暦の最後の主日を王であるキリストの祭日で締めくくるのは、わたしたちが最終的に迎えする、あるいはわたしたちが最終的にそのお方の前に呼び集められる、「人の子」である、わたしたち主イエス・キリストにわたしたちの目を向けるためです。そして、この終末の「人の子」は、今日の第一朗読のダニエルの預言のことばによれば、「日の老いたる者」すなわち全能の父である神によって権威と威光と王権を受け、とこしえに全ての民を支配する王として描かれています。今日、わたしたちが祝う王であるキリストは、旧約聖書の中に豊かな背景を持つ、このような王であるイエス・キリストです。キリストというイエスに対する信仰と尊敬をこめた呼びかけも、もとはメシア、すなわち神によって選ばれ、聖なる油を注がれた王を意味していることも、王であるキリストへの信仰の表明であると言えるでしょう。

ダニエルの預言に示されている、終末の出来事の彼方に、全能の父である神によって権威と威光と王権を受ける人の子による支配に対する信仰と希望は、更に、今日わたしたちが歌った答唱詩篇と響き合っています。神を王としてたたえ、その支配に信頼し、この世を支配する全ての力に対する神の支配の勝利を願う旧約の神の民の祈りの歌は、旧約聖書の詩篇のあちこちに見出すことが出来ます。詩篇が祈りのうちにたたえる神は、創造主であり、神の民とされた人々をエジプトの地から導きだされた主であり、彼らの牧者であり、全地を支配される王です。神ならざる者たちの、偽りに満ちた、暴力的な支配に苦しめられてきた人々は、神ならざるものの支配を最終的に打ち滅ぼし、神がその真の支配を確立し、神ならざるものの支配に苦しむ全ての者に、永遠の安息を与えてくださる時を待ち望んでいるのです。聖書が語る終末の神の裁きとは、そのような神の支配の最終的な勝利を意味しているのです。そこにおいて、わた

私たちの主イエス・キリストは、父なる神によって全権をゆだねられた神の子、メシアとして決定的な役割りを果たされ、「彼の支配はとこしえに続き、その統治は滅びることがない」とダニエルの預言が語る、神の永遠のみ国の王となられるのです。

典礼暦の流れに従って歩んできた、わたしたちのこの一年の最後の主日、わたしたちは聖書が語るこのような、わたしたちの歩みの最終目標に向かって目を上げます。そして、今はまだ神ならざるものの支配に悩まされ、苦しみながらも、わたしたちの信仰において約束されている、わたしたちの主イエス・キリストの支配に与る恵みを感謝しつつ、願い求めるのです。

終末の出来事の彼方に、天の雲に乗って来られる「人の子」であるわたしたちの主イエス・キリストは、今、復活されて父なる神の右の座についておられると同時に、「わたしは世の終わりまで、あなた方とともにいる」との、その約束の言葉通り、この世の生を生きるわたしたちの中にいてくださるお方です。そのイエスは、ピラトが書いた「ユダヤ人の王」と言う罪状書のついた十字架の上に、今もそのお姿をわたしたちに示しておられます。王であるキリストの祭日を祝うということは、このような王としてのイエスに心を向けるということでもあります。「わたしの国は、この世には属していない」、直訳では「わたしの国はこの世からのものではない」というおことばは、イエスのこの世における全生涯を要約しているおことばであり、イエスの全存在の意味を解き明かすおことばです。

ダビデ王に与えられた神の約束の実現として、人知れずベツレヘムにお生まれになった嬰兒イエスを、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおられますか」と東方の博士たち訪ねて来たのでした。洗礼者ヨハネは、彼の後から来られるお方であるイエスを指して、「わたしはそのお方の履物の紐を解く値打ちさえない」と言ったのでした。悪霊や病に取り付かれて苦しむ無数の人々をその苦しみから解き放ち、ご自分のもとから離れようとしない群集のために五つのパンでその飢えを満たしてくださったイエスは、しかし、人々の期待に応じて、人々の望みのままに、自らメシア、王となる道を歩むことはなさいませんでした。そのようなイエスに敵意を抱き、イエスを殺そうと計った、ユダヤの指導者たちに訴えられて、ローマの支配に反逆を企てた自称メシアとしてイエスはピラトの前に立っておられるのです。「わたしの国はこの世からのものではない」。この世の只中におられるイエスは、その国を、そのメシアとしての支配を、終末の彼方においてそうであるように、父なる神のみ手から受けておられるのです。メシアの本来の最大の使命は、この世に対する神のみ旨を徹底的受け止め、それを実現することです。この世に対する神の正義と愛をこの世において実現することです。創造主である神への反逆としての、神の被造物で

ある全ての人間の罪、その不条理を一身に背負い、人間の全ての罪を赦してやまない創造主である神の愛を証しするために、イエスはメシアとして、ユダヤ人の王として十字架につけられたのです。人の目にはそうは受け止められない、十字架のメシア、イエス・キリストの真の姿が示されるのは、終末の彼方における、天の雲に乗って来られる「人の子」においてであると、今日朗読された聖書の全体は語っているのです。これが、神がこのわたしたちのためになさってくださったことのアルファでありオメガである、はじめであり終わりである。これこそが神の愛の真実、この世の真の姿を示す真理であると、今日のみことばはわたしたちに訴えかけているのです。ユダヤ人の王、メシアとしての十字架のイエスのお姿を通して示されている、この神の愛の真実、わたしたちの実存を照らすこの真理を見つめつつ、今日の、わたしたちのメシア、王であるキリストの祭日を祝いたいと思います。